

おじさん、いい？  
『○○○の体…』

思う存分使ってね…  
思いっきり喜んでね！

はぁ

うん、  
気持ちいいー  
凄くいいよー

『○○○の中が狭すぎて、  
おじさんのちんぽ、  
潰れちゃいらさうだよー』

あぁ♡

あ♡

あ♡  
あ♡





ココロが俺に会いに来たのはある日の夜のことであった。  
実は、あの日は彼女の存在を知ってから数カ月ぶりに、初めて話を交わした日だった。

『おじさん、こんばんわ！私は秦ココロ。おじさんに会いに来たよ。』

『あ、君は昼間に見たあの子？』

『演技が下手だね！おじさん、いつもココロの事を見てたでしょう。』

俺は彼女を部屋に入れて、事はあっという間に起こった。

『はあ… はあ… おじさん、そこ気持ちいい… もっとなめて… おかしいよ。そんなにきれいなところじゃないのに、おじさん凄く喜んです。』

『ココロ！凄く美味しいよ！もっとちょうだい。おじさんにココロの美味しい水、もっとちょうだい！』







彼女は小さい体で俺を誘惑して毎晩ここを訪れてきた。

『あふふん、おじさんの感情が伝わってくる。あの感情がココロに届くまでもっと喜んで、もっと愛してよ！』

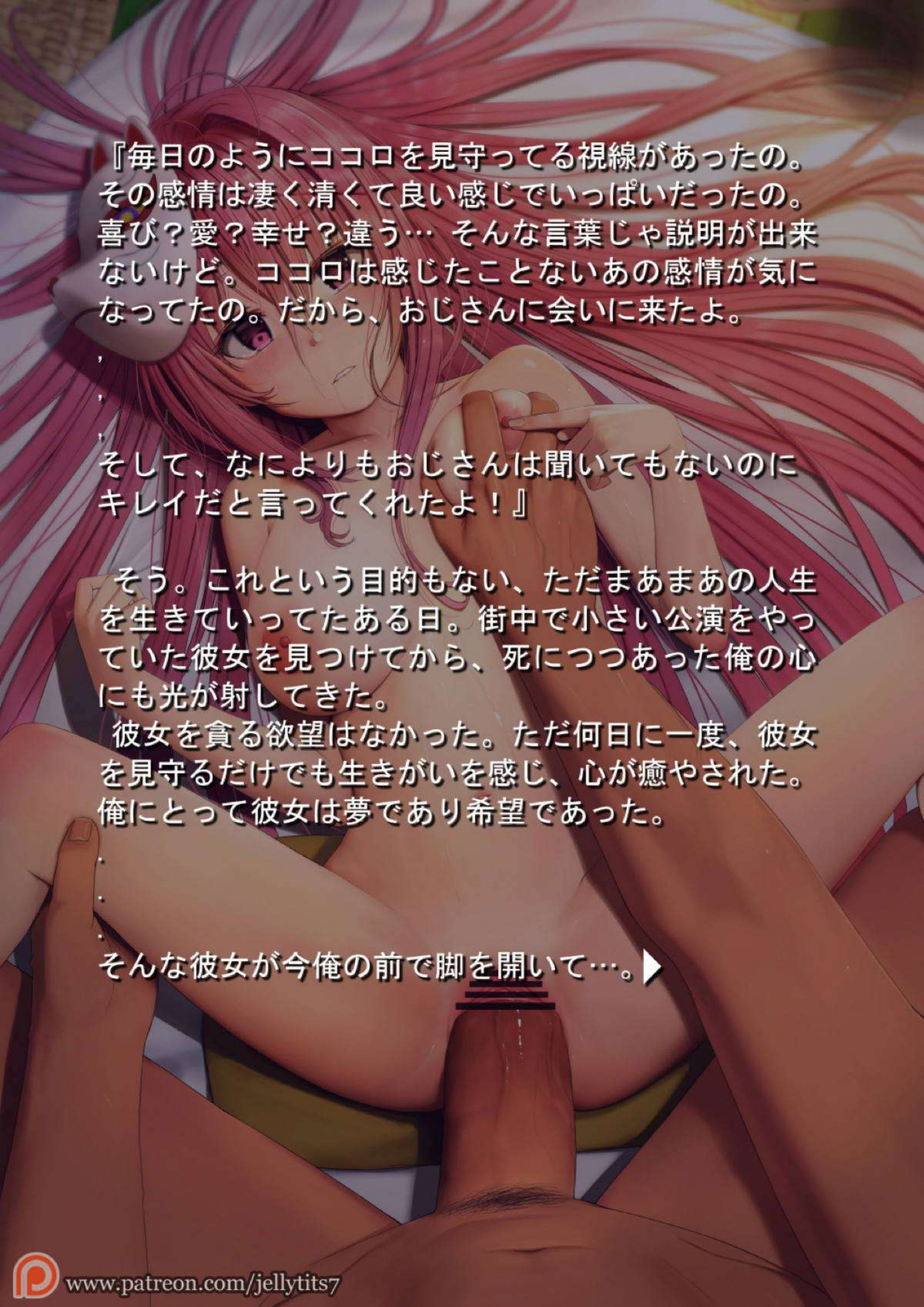
‘おじさんの感情が伝わってくる。’彼女の口癖だった。たまには本当に俺の感情を見極めて、真似をする事もあった。最初の頃には、あの怪しいお面を時々変えながら自分の感情を表現していたけど、時間が経つことによって、お面を変えないようになってきた。’私達は一体だから大丈夫。全部知ってるでしょ?’ …と。

関係を重ねて行ってたいたる日、彼女に聞いた。なぜよりによって俺という男を選んだのかと。

『ふふ、本当に知らないの?』

彼女は待っていたかのように浮かれて喋り出し始めた。▶





『毎日のようにココロを見守ってる視線があったの。その感情は凄く清くて良い感じでいっぱいだったの。喜び？愛？幸せ？違う… そんな言葉じゃ説明が出来ないけど。ココロは感じたことないあの感情が気になってたの。だから、おじさんに会いに来たよ。

そして、なによりもおじさんは聞いてもないのにキレイだと言ってくれたよ！』

そう。これという目的もない、ただまあまあの人生を生きていってたある日。街中で小さい公演をやっていた彼女を見つけてから、死につつあった俺の心にも光が射してきた。

彼女を貪る欲望はなかった。ただ何日に一度、彼女を見守るだけでも生きがいを感じ、心が癒やされた。俺にとって彼女は夢であり希望であった。

そんな彼女が今俺の前で脚を開いて…。▶





『きゃふうん、ココロの下腹がびくびくするよ。も  
っと突いて、おじさん!』

『うん、わかった!おじさんがココロの中を気持ち  
よく突いてあげるよ!』

俺は彼女の下腹を執拗に突く続けた。

彼女の目、鼻、口、柔らかいおっぱい。  
全てが好きだったが、何より強烈な刺激は、俺の大  
きいモノに振り回され、子宮に乗ってびくびくする  
彼女のへそだった。それを見るたびに、俺は毎日の  
ように軽蔑していた、自分の肉身の存在理由を思い  
知った。初めて生きていることを感じた。▶









안녕하세요  
♡





『はうっ！生きてる。俺、生きてる！ココロのおへそ、キレイ！愛してるよ！本当に愛してる！！』

『あはは、ココロのおへそキレイ？ココロキレイ？もっとキレイだと言って！ココロの全てをキレイだと言ってね！』

『あうっ！し、絞まる！ココロも気持ちいいんだよね？おじさんばかり気持ちいいんじゃないよね？』

『うふっ、おじさんが好きならココロも好き！だから、おじさんの気持ちのまま動いてね！』

ココロはそういいながらも、しばしば腰を動かしながら喘ぎ声を吐いた。絡みついていた彼女の膣内が漸く広がってきた。時が来た。

『おじさん、ココロ、ココロいく！もういきそう！もっと強く！もっと早く！ココロの中をかき回して！！』







っい

はあー

はあー

あっ

はあー

ズボ

「「「」の小壺を  
もっと強く突いてえ！」

ズボ

うん、「「「」  
思いつきで喜ぶぞー」

おじさんに見かしてー  
「「「」の鳴き声ー」

ズボ









彼女はまるで獣のような声を出しながら絶頂に達した。

最初の時には奇怪な声に(表情も怖かった)驚いて、何かおかしくなったのかと思ってたけど、関係を重ねると共に、この表現が彼女にとっては一番の喜びだということに気づいた。

相変わらず、少しの表情の変化すらなかったけど、あの小さい体の中でいったい何という事が起きているんだろう。

と、俺は外の殻ではない、彼女の内面で起きている喜びや歓喜を見ようとした。

『ああ… ココロが感じれる… 』

『おじさん… ココロと一体になったの…?』

『…そうみたい… 』

『ココロはまだよく分からない。おじさんの感情…  
また今度教えてね… じゃあ、ね… 』▶





満足した彼女は自分の全ての感情を消して深い眠りに落ちた。こうなると朝まで起きない。

彼女が起きている時には腰を優しく動かしていたけど、もうそんな必要がなくなった。極度の興奮感が襲ってくる。

『ああ、ココロ！おじさんのちんぽ、ココロの小さいおまんこの中で溶けちゃいそう！！』

俺はちんぽの先っぽが痛いほど彼女の中をかき回した。意識のない彼女のこの小さい体を犯すことに背徳感もあったけど、寧ろそれが俺を更に興奮させた。強く、もっと強くぶち込めばぶち込むほど彼女の体が喜んでいるのが感じられた。無我夢中で喘いでいると腰が抜けそうな強烈な射精感が押しよってきた。

『出る！出る！』▶





『ココロの中に出すよおお！！』





ああ、  
「ロロオオオ!!」







ぶるぶるぶる

ガク

ん

ぶるぶる

ん

ガク

ガク

ん

ん

ガク

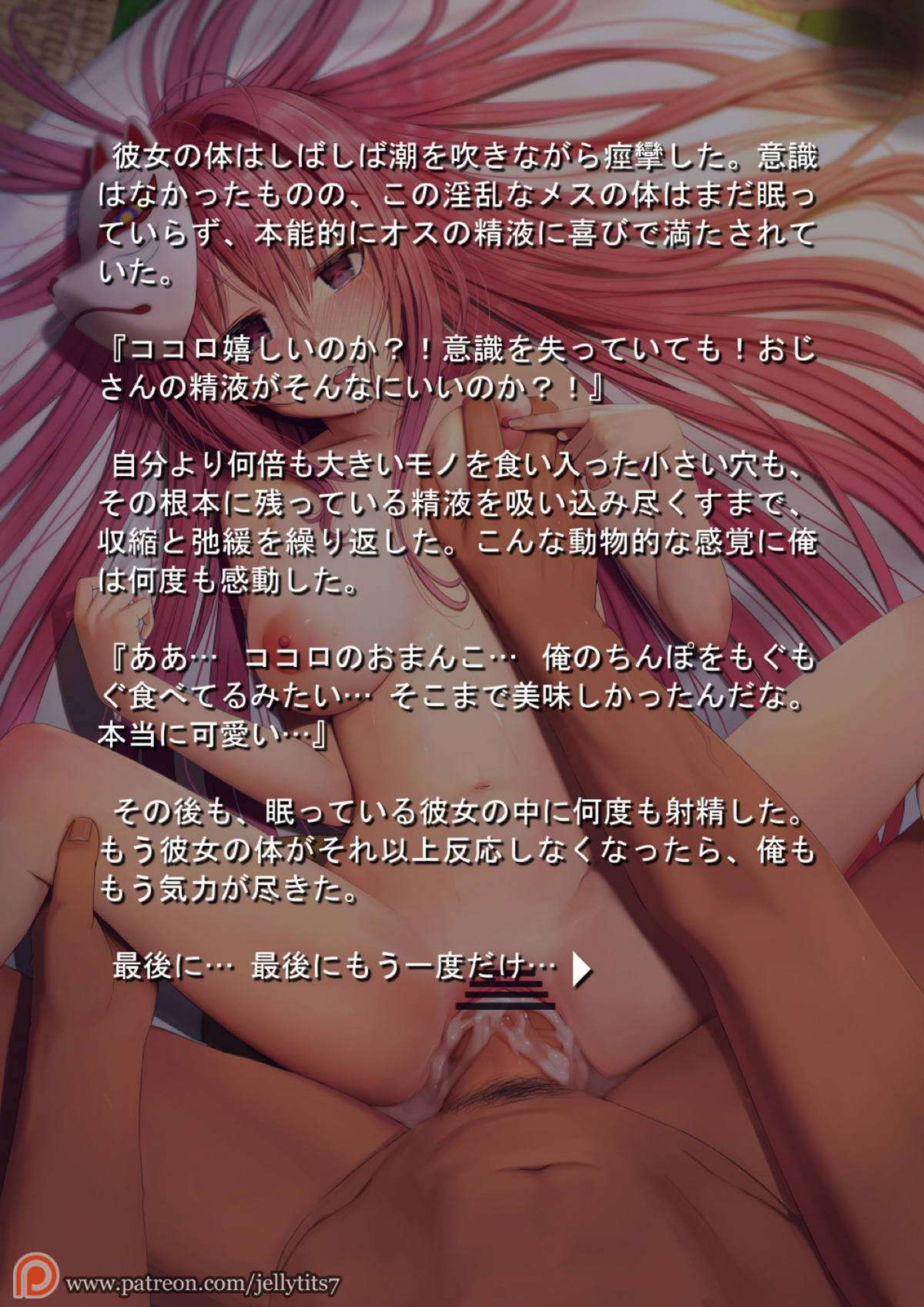
ビッパ

ビッパ



ガク





彼女の体はしばしば潮を吹きながら痙攣した。意識はなかったものの、この淫乱なメスの体はまだ眠っていららず、本能的にオスの精液に喜びで満たされていた。

『ココロ嬉しいのか?! 意識を失っていても! おじさんの精液がそんなにいいのか?!』

自分より何倍も大きいモノを食い入った小さい穴も、その根本に残っている精液を吸い込み尽くすまで、収縮と弛緩を繰り返した。こんな動物的な感覚に俺は何度も感動した。

『ああ… ココロのおまんこ… 俺のちんぽをもぐもぐ食べてるみたい… そこまで美味しかったんだな。本当に可愛い…』

その後も、眠っている彼女の中に何度も射精した。もう彼女の体がそれ以上反応しなくなったら、俺ももう気力が尽きた。

最後に… 最後にもう一度だけ… ▶




















俺は最後に絞り出すよう、ココロの小さい顔に精液をぶっかけた。そのまま倒れるように横になって、すやすや眠っている彼女の姿を見つめた。そして、なよやかに囁いた。

『ココロ… キレイだね…』

End





























